



福島県 小学校長会 会報

- 巻頭言 1
- 教育ニュース 2
- 特集「福島に誇りをもち 多様な他
者と協働しながら 持続可能な社会
を創る子どもの育成」 3～6
- 支会だより 7～10
- ふくしま人 この道に生きる 11
- 表彰、役員・事務局員名簿 12



福島県小学校長会会長あいさつ

若年層教員の育成が教育の未来を創る

福島県小学校長会会長 小野 真 教

文部科学省の令和4年度の学校教員統計によると、公立学校における教員の平均年齢は、平成22年以降、小中学校で低下傾向が続いています。また、30歳未満の比率が上昇し、50歳以上の比率が低下しています。学校規模の大小を問わず、多くの学校で若手教員が増える一方でベテラン教員が減少し、さらに、40歳前後の中堅教員も少ない状況です。

本校の昨年度の例を挙げますと、全学年1クラスの学校で、通常学級担任のうち、20代の若手教員が4名、40代が1名、そして50代が1名という年齢構成でした。また、福島市内の学校では、50・60代が多く、30・40代は少なく、20代が増加傾向にあります。

今や若年層教員の養成は、どの学校でも重要な経営課題です。各学校においては、それぞれの状況に応じた様々な工夫を凝らし、その対応策を具現化しようと努力していることと思います。しかし、若年層教員の育成を支えるべき中堅教員が50代以上に少ない現状において、長年の経験をもつベテラン教員が、今まで培ってきた知識や経験に基づき、適切な助言や模範を示す必要性が高まっています。

ベテラン教員は、昭和、平成、令和の3つの時代を生き抜き、学習指導要領の3度の改定を乗り越え、それぞれの時代に応じた教育をしてきた、まさに教育の熟練者と言えるでしょう。学級経営、学習指導、生徒指導、保護者対応等において豊富な経験と豊かな知識を有しています。ベテラン教員が退職を迎える前に、今こそその力を最大限に発揮していただき、若手教員の成長を力強く後押ししていただきたいと思います。

一方、若手教員は、ICT活用や外国語教育等で能力を発揮しており、そのフットワークの軽さも強みです。しかしながら、保護者対応や児童の状況把握、授業の基本的な構成といった点においては、課題を抱えていることも少なくありません。

それぞれの教員のもつ良さを融合させ、お互いの強みを学び合うことによって、教員全体の資質向上を図ることが大切です。そのためには学校組織全体として、意図的かつ計画的に教員の育成を進めていく必要があります。

若手教員の資質・能力育成に、他の教職員が共同して取り組み、学校が抱える多様な教育課題に一丸となって立ち向かっていくことこそが、本県教育の未来を拓く鍵となると確信しています。

〈 令和7年度 福島県小学校長会 第1回理事会開催 〉

福島県小学校長会の第1回理事会が4月16日(水)、パルセいいざかにおいて開催され、会長として福島市立清明小学校長 小野真教氏が選出されました。また、新役員として次のとおり決定するとともに、本年度の活動方針などが承認されました。

- | | | | |
|------|-------------|-------|-------------|
| ■会 長 | 小野 真教 (清 明) | ■監 事 | 緑川 喜久 (柏 城) |
| ■副会長 | 小川 尚子 (飯 坂) | | 五十嵐博也 (喜多方) |
| | 嶋 忠夫 (金 透) | | 石井 智明 (双葉南) |
| | 鈴木 正和 (鶴 城) | ■常任理事 | 五十嵐 修 (上保原) |
| | 鈴木和一郎 (原町一) | | 仁科 英俊 (白河一) |
| | | | 菅家 篤 (坂下南) |
| | | | 大石 正文 (湯本一) |



令和7年度 県小・中学校長会合同開会式あいさつ



福島県教育委員会教育長 鈴木 竜次

令和7年度福島県小中学校長会合同開会式の開催にあたり、お祝いを申し上げます。皆様には日頃より学校教育の発展のため日々ご尽力をいただいていることに心から感謝申し上げます。

さて、現代は将来の予測が困難な時代であり、少子高齢化の急速な進展や国際情勢の急激な変化、地域コミュニティの希薄化などが社会全体の継続的な課題となっております。本県においては東日本大震災、原子力発電所事故から14年余りが経過しましたが、その復興、創生の過程で子どもと大人がともに学びあい、自らの生き方を考え、社会を創造していくために試行錯誤する学びを展開してまいりました。このような中、令和4年度から始まった第7次福島県総合教育計画においては、すべての子どもに必要な資質能力の育成とともに一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せである Well-being の実現を目指し、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへの転換を進める「学びの変革」とその実現に向けた環境づくりとしての「学校の在り方の変革」を柱に掲げております。

特に、施策1「『学びの変革』によって資質・能力を確実に育成する」では、ふくしま学力調査等のエビデンスを生かし、ICTを活用した個別最適化された学びへの変革を進めるとともに、市町村教育委員会と連携した学校訪問指導の充実、英語力向上に向けた小中高連携の推進や教員の各種研修による指導力の向上を図ります。

また、施策2「『学校の在り方の変革』によって教員の力、学校の力を最大化する」では、今年の2月に改訂しました「教職員働き方改革アクションプラン」をもとに、標準授業時数に基づき教育課程の見直しを図る他、今年度より一部の学校に対して配置した教頭マネジメント支援教員、スクール・サポート・スタッフや部活動指導員の他、外部人材を活用するなど、教員が自ら学び、児童生徒と向き合う時間の確保に努めることで、持続可能な教育環境の整備を一層推進してまいります。

さらに、施策3「学びのセーフティーネットと個性を伸ばす教育によって多様性を力に変える土壌をつくる」につきましては、特別支援教育のさらなる充実に努めるとともに、様々な困難を抱える児童生徒を支援するため、不登校児童生徒支援センター（roomF）におけるオンライン支援を全県に広げるなど、子どもたちが安心して学ぶことができる教育環境の整備に取り組んでまいります。

皆様と想いを共有しながら、子どもたちの可能性を信じ、誰一人取り残さない、一人一人が主役となる教育を実現できるよう取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

結びに、皆様が校長としてのリーダーシップを存分に発揮し、ご活躍いただくことで本県の教育がますます充実することを期待するとともに、福島県小学校長会および福島県中学校長会がさらなる発展をされますよう祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

南
会
津檜枝岐を未来につなぐ学び舎へ
～地域と育む子どもたちの誇り～

檜枝岐村立檜枝岐小学校 小野 泰弘

1 はじめに

福島県の西南端、尾瀬国立公園の玄関口に位置する檜枝岐村は、人口約 500 人弱の小さな村であり、面積の約 98%を森林が占める豊かな自然に恵まれています。この地には、江戸時代から 280 年以上もの間、村民によって受け継がれてきた檜枝岐歌舞伎をはじめとする独自の文化と伝統が息づいています。

本村では、小中一貫教育を行っており「郷土を愛し、夢に向かって学び続ける子ども」を教育目標としております。この継続的な学びの環境は、児童生徒の発達段階に応じたきめ細やかな指導を可能にし、地域文化や自然への理解を深めるうえで極めて効果的です。また、教師間の密な連携によって、児童生徒一人一人の成長を長期的な視点で見守り、支えることができるのも大きな強みです。

2 地域への誇りを育み、多様な他者と協働しながら持続可能な社会を創る子どもの育成

檜枝岐小学校では、村の豊かな自然や歴史、人々の温かさに触れる多様な教育活動を展開しており、教室の枠を越え、村全体を学びの場として捉え、地域の方々と交流しながら、生きた知識や知恵を身に付けています。

特に、村に受け継がれる伝統芸能「檜枝岐歌舞伎」の学習は、子どもたちの地域への誇りを醸成するうえで重要な役割を果たしています。地域で長年にわたり歌舞伎に携わってきた方々を講師に迎え、その歴史や文化、演じることの楽しさを学ぶ機会があります。そして舞台化粧や衣装、所作の一つ一つを丁寧に教わるなかで、子どもたちは地域の方々の情熱や技に触れ、自らの暮らす土地の文化的価値をより深く認識していきます。



地域の方々とともに目標に向かって努力する経験は、子どもたちのコミュニケーション能力や協調性を育み、多様な他者と協働する力を養う貴重な機会となっています。



さらに、檜枝岐村の恵まれた自然環境を活かした学習も積極的に取り入れています。尾瀬散策や登山、川での自然体験活動を通して、子どもたちは地域のガイドとともに自然の恵みや厳しさ、生態系のつながりを肌で感じます。また、良質な木材を活用した伝統工芸「曲げ輪っば」の製作体験などでは、長年受け継がれてきた自然との共存の知恵を地域の職人から学び、持続可能な社会の在り方について考える契機となっています。



こうした学びを通して、檜枝岐小学校の子どもたちは生まれ育った地域への愛情と誇りを深めるとともに、多様な価値観を持つ人々との協働の大切さを理解し、持続可能な社会の担い手としての意識を育んでいます。子どもたちは、地域の伝統を守りながら、新たな未来を切り拓く力を着実に身に付けています。

3 むすびに

檜枝岐小学校の教育実践には、小さな村だからこそ可能な、地域全体を巻き込んだ価値ある学びがあります。子どもたちは地域の文化や自然、人々の想いに触れることで、自らのルーツを深く理解し、地域社会の一員としての自覚を高めています。そしてこの学びは、彼らが将来どのような道へ進んだとしても、故郷を大切に思い、地域社会に貢献しようとする精神を育む礎になります。

この豊かな学びの風景を未来へとつなげるため、檜枝岐の教育の魅力を県内外に広く発信していきたいと考えています。

相馬

ふるさとに誇りをもち 多様な他者と協働しながら 持続可能な社会を創る子どもの育成
～地域学校協働活動をいかして～

南相馬市立原町第三小学校 烏中 雪野

1 はじめに

相馬支会の各学校は、持続可能な社会を構築していくことや「福島」のふるさとをみつめ、学校・家庭・地域の連携・協働体制の強化を図る取組をしている。

本校がある南相馬市は、鹿島区 2 校、原町区 8 校、小高区 1 校の計 11 校で豊かな自然に恵まれた地域をフィールドとした「南相馬ならではのふるさと愛」育成に向けた特色ある教育活動が行われている。地域学校協働活動を生かした本校での取組を紹介したい。

2 福島に誇りをもち、多様な他者と協働しながら、持続可能な社会を創る子どもの育成のために

(1) 至誠学（まごころ学）の実践

「至誠学（まごころ学）」とは、南相馬ならではの取組であり、南相馬の「過去・現在・未来」について体系的・探究的に活動し、様々な学習に南相馬の「ひと・もの・こと」を取り入れて南相馬のよさを実感していくものである。

① 主な学び

6 年：相馬野馬追探究での博物館連携

5 年：福島ロボテス探究での企業連携

4 年：相馬地方民謡・踊り探究での地域連携

3 年：郷土料理・地域産業探究での地域連携

6 年ではこれまで個々に探究してきたテーマでの疑問点を博物館職員へ疑問提起することですます深い学習につながった。



「博物館連携による相馬野馬追探究」

② 他教科との関連

特別の教科道徳の内容項目で報徳仕法や相馬野馬追などの郷土の歴史や文化、伝統行事などに触れる機会を多くもち、よりよい生き方を考える機会を工夫している。

③ 成果の発表

ふるさと南相馬のよさやまごころのよさを地域に伝える機会・方法を工夫し、運動会や学習発表会での発表を行っている。

また、作文や新聞記事にまとめる活動に取り組んでいる。



「学習発表会での地域探究成果発表」

(2) 地域交流・地域貢献の実践

① 地域農産物での地域交流



枝豆栽培で収穫したものを調理し、これまでの各種探究活動で関わった地域の方を招待し、交流と会食の機会をもった。

② 地域農産物の 6 次化探究

南相馬産ブロッコリーに着目して、栽培・収穫・現地調査等を探究後、付加価値を付けた商品開発を行った。

3 むすびに

本校は、南相馬市の豊かな自然や風土に恵まれ、子どもたちに寄り添ってくださる地域の方々に支えられ、教育活動を展開している。私たち教職員も、地域の宝である子どもたちと一緒に、ふるさと南相馬に学び、資質向上に努め、地域とともにある学校づくりを進めていきたい。

今後も地域人材・素材を生かした教育活動を行っていくことでふるさとを愛し、自己の生き方を考え、持続可能な社会を創る子どもを育てていきたい。

双
葉双葉郡の未来を創る
～ふるさと創造学を通して～

川内村立川内小中学園 豊田 邦久

1 はじめに

東日本大震災及び原発事故を含めた複合災害から 14 年が経過し、震災後に生まれた児童生徒に配慮しつつ、新たに生まれた課題等に対して、外部の多様な主体や関係組織と連携・協力しながら教育活動に取り組んでいる。

2 福島に誇りをもち、多様な他者と協働しながら持続可能な社会を創る子どもの育成

現在、双葉郡では双葉郡ならではの魅力的な教育の推進による人材育成に取り組んでいる。

各市町村で一貫した価値観や学力観のもと、教育目標からカリキュラムまでを総合的に包含した教育体系を組み上げ、双葉郡ならではの魅力的で新しい教育を進めている。ふるさとへの誇りと自ら未来を切り拓く生きる力を育み、復興・創生や持続可能な地域づくりに貢献できる人材育成を目標としている。

特に、教育を中心とした双葉郡の絆づくりを町村や学校の垣根を越えた交流を通して、双葉郡の子どもとしてのアイデンティティを育む取組を推進している。学校を地域コミュニティの中核と位置づけ、多様な主体や組織と連携して教育の充実を図り、子どもたちの実践的な学びをコミュニティの活性化につなげ、地域の人々との出会いが子どもの学びを充実させている。

特に教育と地域復興・創生の相乗効果を生み出しているものとして「ふるさと創造学」がある。

「ふるさと創造学」は、復興・創生に関する探究的な学習としての双葉郡独自の取組である。

中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校で連携・協働して取り組んでいる。総合的な学習の時間を中心に、そのねらいや身に付けたプロセス・成果等を、毎年実施される「ふるさと創造学サミット」で発表している。「ふるさと創造学」では、震災や原発事故を通じ、子どもたちが探究学習で取り組んだふるさとの復興・創生に関わる内容を調べ、考え、まとめて、それらを発表することで、ふるさとへの誇りと自ら未来を創造する思いを育んでいる。子どもたちが日常生活や地域社会に目を向け、課題発見と解決のために考え学び行動する探究的な学習を通して、主体性や協働性・創造性を伸ばすこととしている。

具体的な学習内容は、学校の特色や子どもの実態、地域の条件等に合わせて各校で定めている。

また、郡内小学校の子どもたちが交流し、つながりを作る場として、平成 27 年度から「双葉郡小学校絆づくり交流会」を開催している。双葉郡の未来を見据えた 8 町村の小学校や義務教育学校（前期課程）、特別支援学校の児童による学校の垣根を越えた仲間づくりと、双葉郡内勤務の教職員が集い情報交換等を通して、双葉郡の理解と指導へのモチベーションを高めることを主な目的としている。

3 むすびに

児童生徒数の減少により小規模化している学校では、同年代の子ども同士の関わりが少ない現状がある。同年代との交流や共同学習により子どもたちの意欲を高め、適度な向上心や社会性を育むためにも、町村の垣根を越えて相互の学び合いの場となる機会を設けることが今後も継続的に必要になる。その学びの機会として「ふるさと創造学」や「双葉郡小学校絆づくり交流会」を継続発展させていきたいと思う。



いわき

地域を思い、地域の方々とかわり
ながら未来を創る子どもの育成
～ハスの再生活動を通して～

いわき市立高坂小学校 松本 美穂子

1 はじめに

本校は、街を見渡すことができる高台にあり、長年の間本校を見守ってきた樹齢 500 年を超えるという「かやの木」と共に、地域の皆様と歩んできた学校である。「かやの木」魂として、「かしこく・やさしく・たくましく」を合い言葉に児童は学校生活を送っており、総合的な学習の時間では、「ハス再生プロジェクト」としての活動を続けてきた。以下にその一部を紹介する。

2 福島に誇りをもち 多様な他者と協働しながら 持続可能な社会を創る子どもの育成

(1) プロジェクトに至る経緯

以前より、地域に学ぶ学習をしてきた中で、内郷地区にある国宝「白水阿弥陀堂」の住職様よりハスの種子をいただき、本校で育てていた。2 年前に、白水阿弥陀堂の浄土庭園のハスがあまり咲かなくなってきたことを聞いた児童が、いわき市にハス再生の協力を申し出たところから活動が始まった。

(2) 活動内容

① ハスの植え付け

昨年度は、市文化財課を中心とした地域の皆様のご理解・ご協力をいただき、内郷地区の小学校で、浄土庭園へのハスの定植活動を実施した。ハス再生に向けて、各小学校と協働で増やしてきたハスである。本校では 6 年生が参加し、学校の「希望の池」と名付けた池やたらいで育ててきたハスを定植した。

② オーガニックコットン栽培

古着のリユース・リサイクルに取り組む NPO 法人「ザ・ピープル」の支援をいただき、オーガニックコットンを植え、コットンペイブ



と名付けられた人形作りを行った。その作品を白水阿弥陀堂にある観光案内所で販売もさせていただくことができた。ハスの定植だけでなく、地域の観光についても考えを深めることができた。

③ 花いっぱい運動

プロジェクトの一環として「ハスの花咲く内郷・常磐プロジェクト」をスタートさせた。内郷地区は、2024 年 9 月の台風 13 号に関わる線状降水帯発生により、白水阿弥陀堂を含む多くの地域が濁流にのみ込まれてしまった。ハスは泥の中からきれいな花を咲かせる特徴を持つことから、白水阿弥陀堂への定植だけでなく、ハスを復旧のシンボルとしても広げていきたいと考えた。そこで多くの皆様の目に触れる様々な施設に、種レンコンが入ったたらい等を玄関先に置いていただいた。特に幼稚園・保育園等の施設にもご協力をいただいたことで、これからの世代を担う子どもたちにも継承できればと考えている。

さらに内郷公民館の協力もあり、折り紙講座を実施し、ハスの花や種を入れる入れ物を作成した。実際に、この講座で作成した折り紙の入れ物にハスの種を入れ、内郷公民館や郵便局に置かせていただいた。施設だけでなく、地域の皆様にもプロジェクトについてご理解いただき、多くの皆様に種をお持ち帰りいただけたことは、プロジェクトを進める上で、大変嬉しいことであった。今後、内郷・常磐地区の様々な場所で美しいハスの花が見られることと思われる。

3 むすびに

今回の活動は、コロナ禍の際に、児童が自分たちも地域の一員として何かできることはないだろうかという思いで始まった「虹色スマイルプロジェクト」(医療従事者や地域の方に向けた校舎のブルーライトアップ)が原点となっている。この思いが広がり、ハス再生の協力へとつながっていったと考えられる。さらに、多くの地域の皆様のご理解・ご協力のお陰で、子どもの思いをつなぐことができた。思いをつないでくださった多くの皆様に感謝したい。今後も地域の皆様との連携を大事にしながら、持続可能な活動に取り組み、かしこく・やさしく・たくましい子どもたちが美しい花を咲かせられるような教育活動に邁進していきたい。



伊
達

日々に生かす研修を

伊達市立上保原小学校 五十嵐 修

1 はじめに

伊達支会は、伊達市、桑折町、国見町の 17 校の校長で組織されている。今年度は、新任 1 名を含む 4 名の新会員を迎え、新たなスタートを切った。研修会や各専門部会等の活動を通して、校長としての力量を高めるべく取り組んでいく。

2 今年度の取組

(1) 主題研究・推進

今年度も、第 8 分科会「危機対応」と第 9 分科会「自立と社会性」に分かれて研究を推進している。第 9 分科会は、県小学校長会安達大会の発表支会になっており、8 月の安達大会に向けて研究の詰めを行っている。

第 8 分科会は、前半は現在の研究のまとめを推進し、後半は次なる研究課題「組織・運営」視点 2 の研究(令和 9 年度全連小郡山大会で発表)を推進していく予定である。研究したことを日々の学校経営に生かすことができるように取り組んでいきたい。

(2) 研修他(小中学校長協議会での取組を含む)

○「聖光学院高等学校見学」(9 月)

<施設見学・授業参観・校長講話 他>
スポーツで全国区となった聖光学院高校。社会人として幅広く活躍できる人物の育成等について研修する。

○「Uープレイス伊達見学」(12 月)

<施設見学・講話 他>
「あなたの居場所」をコンセプトに多世代交流を進めている同所。世代循環型のまちづくり等について学んでいく。

○ 教職員研修講座(6 月～8 月)

学校でのリーダーを目指す教職員に、学校リーダーとしての専門的な力量を培うことを目的として研修会を実施する。

3 むすびに

8 月の県小学校長会 100 周年、そして県小学校長会安達大会の成功に向けて、各自の役割をしっかりと果たしたい。「伊達はひとつ」そして「県北はひとつ」の精神で臨みたいと考えている。

安
達

学校経営力の向上を共に目指して ～「安達はひとつ」を合言葉に～

本宮市立本宮小学校 佐久間 仁

1 はじめに

本支会は、二本松市、本宮市、大玉村の二市一村 25 名の会員で組織している。校長としての資質・能力、学校経営力の向上という目標を掲げ、会員が直面する課題を共有し、協議・情報交換をするなど、組織力を生かした課題解決の場を大切にしながら活動を進めている。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

「福島に誇りをもち多様な他者と協働しながら持続可能な社会を創る子ども」の育成に向けた校長としての取組が明らかになるよう研究を進める。県研究協議会第 7 分科会(学校安全)の視点 2(家庭や地域社会との連携)における発表を見据えて、支会全体で「安全・防災教育の推進と校長の在り方」に焦点をあて、研究を推進する。

(2) 県研究協議会安達大会の運営

8 月 6 日・7 日に二本松市を会場に開催される安達大会の成功に向け、福島支会、伊達支会と共に実行委員会を組織し、県校長会事務局と連携しながら準備を進める。

全体会では、前二本松市教育委員会教育長の丹野学氏に「『小学校長職』今までとこれから～東日本大震災の影響をふまえて～」の演題で記念講演をしていただく。

(3) 各専門部会

行財政・研究・生徒指導・広報の 4 つの専門部で活動を進める。行財政や生徒指導では、各種調査などを基に当面する諸課題についての情報収集を行うと共に、共通する課題について情報交換を行う。広報では、年 3 回発行の広報「安達太良」への寄稿を通じて、会員相互の研鑽・交流を推進する。

(4) 関係諸機関との連携

各種教育団体や地区小中学校長会研究協議会との連携を密にし、教育課題の解決と教職員の資質・能力の向上に資する活動(小学校教育研究会、中堅教員等実務研修会等)の充実を図り、人材育成に努める。

3 むすびに

学校課題が多様化・複雑化している今こそ、会員の連携を強化し、安達が「ひとつ」になって課題解決に向けた取組を推進していきたい。

郡
山

「校長同士が学び合う校長会」をめざして

郡山市立金透小学校 嶋 忠夫

1 はじめに

本支会は、小学校 49 校、義務教育学校 2 校、計 51 校の校長、副校長で組織しており、今年度、昇任された 5 名の校長先生、副校長先生、そして 10 名の特例任用の校長先生方をお迎えし、55 名でスタートした。各学校の教育課題を校長会で共有し、互いに知恵を出し合う「チーム校長会」、そして「校長同士が学び合う校長会」をめざし、校長としての資質・能力の向上、各学校の教育活動の充実を図っていくこととした。

2 今年度の取組

(1) 校長会研修会の実施

不登校児童の増加や特別な支援を要する児童の指導のあり方、適切な保護者対応の仕方、教員不足への対応、教職員の働き方改革、不祥事の根絶など、各学校の教育課題や校長先生方のニーズに応じた研修会を 4 回実施する予定である。全校長が共通理解のもと、実態に応じた取組ができるような校長同士の学び合いの場としていく。

(2) 研究の推進

第 53 回福島県小学校長会研究協議会安達大会において「評価・改善」「豊かな人間性」「研究・研修」の 3 分科会での発表の機会を得ており、全会員の参画のもと、学校経営の改善・充実に結びつくような実践的な研究を推進していく。

(3) 方部情報交換会の実施

本市立学校は、東西南北中の 5 方部に分かれており、定例の校長会の中で、方部ごとの情報交換会を実施している。近隣の校長同士が些細なことであっても、情報を交換し、課題や悩み等についてともに考え、対応していくことができる場としていく。

3 むすびに

令和 9 年度には、第 79 回全国小学校長会研究協議会福島大会が、本市において開催される。全国からたくさんの校長先生方をお迎えし、実り多い大会となるよう、本支会としても、県校長会と連携を図りながら、計画的に準備を進めるとともに、校長会のチーム力の向上を図ってまいりたいと考えている。

岩
瀬

情報交換のさらなる充実

須賀川市立第三小学校 森藤 雅之

1 はじめに

岩瀬支会は須賀川市 16 校（義務教育学校前期課程 1 校を含む）鏡石町 2 校、天栄村 4 校の 22 名の会員で構成されている。

令和 6 年度末人事異動により 9 名の会員を新たに仲間として迎え「岩瀬は一枚岩」を合言葉に、会員一丸となって取り組んでいる。

また、昨年度より主体的・対話的で深い学びを実現するための校長の在り方について研究を継続している。

2 今年度の取組

(1) 学校経営充実のための研修会

4 月の総会、4 回の地区校長会、さらに各校の学校経営・運営に役立てるために、2 回の学校経営研究会を計画している。

① 服務対策委員会

中学校長会との連携を図り、不祥事防止のための「公務員倫理の確立・服務規律の厳正化、不祥事防止体制の整備」を図りながら「教職員の不祥事」に対し、全教職員の注意を喚起するとともに、教職員の不祥事の絶無を期すことを目的として行う。

② 教育講演会

学校課題解決の一助となる教育講演会を年 2 回実施する。教育関係者はもとより、教育関係者以外の講師も招き、幅広い知見が得られるようにする。

(2) 組織的対応による人材育成

① 新任校長に向けての研修会

年 3 回、協議会会長・副会長による研修会を行う。校長としての心得や地区の特質等、実践に生かせる内容を計画している。

② 岩瀬地区教職教養講座

昇任審査を目指す教職員の人材育成と資質向上のため中学校長会と連携し、夏季休業中に 3 日間実施する。

3 むすびに

組織的・計画的な研修や会議は、校長としての資質を高めるが、日々の情報交換はさらに大切である。各校における課題解決への取組の共有を通して学校経営が充実するよう校長同士の結びつきをさらに強化していきたい。

石
川

小規模のよさを活かして

玉川村立玉川第一小学校 双里 義和

1 はじめに

今年度初めに石川町の小学校統合により石川支会の校長会は、7名という少ない会員数で組織されている。会員一人一人が複数の役職を兼務する厳しい状況ではあるが、会員相互の絆は強く、情報の共有や相互理解を図り、密接な連携を保ちながら活動している。小規模のよさを生かして、できうる範囲での運営を心がけていきたい。

2 今年度の取組

(1) 運営の基本方針

学校管理運営上の今日的な課題とその取組について情報交換する事で共有化を図る。

(2) 地区研修会

今年度も「学校運営上の諸問題」について、各校の問題提起を受け、話し合いの場を設けていく。特に今日的な課題である「今後の学校教育の在り方」「教職員の業務改善と働き方改革、多忙化解消に向けた各学校の取組」や「学力向上に関する取組」等に視点を当て、研究協議を進める予定である。

(3) 分科会研修

分科会研修を第10分科会(社会との連携・協働)に取り組む。その中でも「視点1：家庭や地域等と連携・協働を深め、創意ある教育活動を展開する学校づくりの推進」に焦点を当て、各校の現状を会員全体で共有し、より具体的な実践の在り方を模索したい。

全会員が進めることで、内容の濃い充実した研修となることが期待できる。

(4) その他

第3回の研修会において、県中教育事務所から地区担当管理主事を講師として招き「学校経営上の諸問題」について講話をいただき、教育現場での対応に役立てていきたい。

3 むすびに

小規模のよさを活かした速やかな現状の把握や共通理解を通し、連携を密にした迅速な対応を今後も進めていきたい。

田
村

自ら判断し行動できる子どもに

田村市立都路小学校 鹿俣 晶子

1 はじめに

本支会は、田村市、三春町、小野町の1市2町、14の会員で構成されている。令和7年度の人事異動で、新しく5名の会員が加わった。

新会員を迎え、新鮮な中にも温かく和やかな雰囲気、新年度をスタートした。

2 今年度の取組

8月6日、7日に開催される県小学校長会安達大会での実践発表に向け、学校安全について「自らの命をまもる安全教育・防災教育の推進と校長の在り方」の視点1「自ら判断し行動できる子どもを育てる安全教育・防災教育の推進」を研究内容として、各校における実践をもとにしながら、研究部を中心に準備を進めている。

5月1日に行った第1回地区小中学校連絡会では、阿部洋己先生(前福島市立松陵中学校長)を講師としてお迎えし、研修会を行った。主に、放射線教育の実践についてご講話をいただく中で、校長として防災教育をどのように進めていけばよいか、マネジメントの方法について学ぶことができた。

「学び」と「訓練」・「実践」をつなぐことが大切であること、また、校長が教職員の個々の取組をつなぎ、協働的な推進体制をつくっていくことなど、実践をもとにした具体的なお話を聴くことができた。会員一人一人が学んだことをもとに各学校で実践し、さらに研究を進めているところである。

研究部の他に、行財政部および生徒指導部では、昨年度に引き続き、県の諸調査の実施とともに調査結果をもとにした諸課題解決、連絡調整等を行っていく。

また、広報部は昨年度同様、広報「田村」を年2回発行し、会員相互の情報の共有を図ることで、会員それぞれがよりよい学校経営に生かしていくことを目指していく。

3 むすびに

今年度も、会員相互の情報交換や連携を大切にしながら、田村地区の子ども達の健やかな成長に向けて、会員一丸となって本会の活動を推進していきたい。

北会津

横の繋がりを大切に！

会津若松市立松長小学校 土屋 裕史

1 はじめに

本支会は、1市2町（会津若松市、磐梯町、猪苗代町）の23校の会員で組織されている。今年度は新任2名を含む7名の新会員を迎えて、新たなスタートを切った。本年度は安達大会、令和9年度的全連小福島大会の発表を見据えて研究を進めていく。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

研究部を中心に2班構成で推進しており、1班は「Ⅱ教育課程 3知性・創造性」、2班は全連小福島大会に向けて第8分科会「リーダー育成」について研究を推進する。特に、1班は安達大会の発表支会であり、研究の視点に沿って実践内容についてまとめ、研修会を通して本発表の準備及び協議を進める。

(2) 各専門部の活動

行財政部、研究部、広報部、生徒指導部の4専門部を設けて活動する。行財政部は、諸調査の実施と集約、報告を行い、教育行政改善のための活動を推進する。研究部は、2班構成で推進していく。広報部は、データによる広報の発行を年3回行う。生徒指導部は、県生徒指導部の活動として諸調査の実施と集約を行い、本支会の現状と課題を「生徒指導部だより」としてまとめ報告する。

(3) 地区研修

本支会では、年3回の研修を通して地区課題や学校の課題について情報共有や意見交換をして、校長としての資質・能力の向上に努めていく。

3 むすびに

各学校の課題は多岐に及んでいる。学校だけでの解決は困難であるが、様々な教育課題について情報を共有し、横の繋がりを大切にして校長同士が学び合う組織となるよう本支会一丸となって取り組んでいきたい。

いわき

いわきの子らのために

～ One Team いわき支会 ～

いわき市立植田小学校 和田 裕二

1 はじめに

いわき支会は、小学校59校のうち、中学校長が併任する2校を除く57名により構成されている。令和6年度末の人事異動による新任18名、異動14名（特例任用5名含む）、再入1名という大幅な会員の入替えを受け、改めて会員相互の連携強化と、組織のさらなる充実を図っていく。

2 今年度の取組

(1) 活動目標と活動の重点

活動目標を「ともに学び、助け合い、子どもたちの幸せのために『変革』する校長会」とし、次の5点を重点に掲げている。

- ① 学校経営の充実
- ② 支部、各専門部、研究部の充実
- ③ 働き方改革の推進
- ④ 教職員の資質向上、人材育成
- ⑤ 県教委・市教委等関係機関との連携

(2) 各専門部会

行財政部では、教育諸条件の課題解決のための調査研究をもとに提案・提言活動を積極的にを行い、教育活動の充実に取り組む。

研究部では、4つのブロックで、それぞれ「学校経営と校長の在り方」の視点を明確に、かつブロックの主体性・独自性を生かした組織的・計画的な実践研究を進める。

広報部では、広報「いわき」を年1回発行し、会員相互の情報共有を深める。

生徒指導部では、当面する重要課題について情報収集を行うとともに、小・中学校長会連絡協議会・各支部生徒指導部会・関係機関等との連携を密にして適切な対応に努める。

(3) 市小学校長会研修会

「すべての人々のウェルビーイング」の実現に向け、校長自ら資質向上に努め、自身のリーダーシップによる円滑な学校運営を推進することを目的に、研修会を年3回実施する。

3 むすびに

いわきの未来を担う子どもたちのために、各校が充実した教育活動を展開できるよう、59名（中学校長と併任を含む）の校長が「互助の精神」で支え合い、組織的に取り組んでいきたい。

地域の想いをかたちにし 楽しいを次世代につなぐ

合同会社 ねっか 代表社員 脇坂 斉弘 さん

日本有数の豪雪地である南会津郡只見町は、ユネスコ・エコパークに認定されるなど、ブナをはじめとする広葉樹の森林や清らかで豊富な水資源を持つ、世界にも誇れる自然豊かな地域です。

その只見の地で、人口減少の中、先祖から受け継いだ田んぼや米作りを守り、次世代につなげるために米を使った産業を興したいと「合同会社ねっか」を農家の仲間と立ち上げた脇坂 斉弘さんに、大切にしていること、活動の原動力となっている想いなどをうかがいました。



—「合同会社ねっか」で大切にされていることを教えてください。—

只見町には、もともとおいしい米を作るのに適した豊かな水や昼夜の寒暖差の大きい気候、農家の皆さんの情熱や知恵、そして、地域みんなで協力する「結」の精神がありました。しかし、全国的な人口減少の例にもれず、只見町も加速度的に人口減少となっています。そんな現状を少しでも変えたいと思い、只見町の誇るべきおいしい米を使って、地域を次世代につないでいくための方法の一つとして、会社を地元の農家仲間と作りました。大きい酒造会社の方からは「もっと効率よくやっては？」や「原価計算をしては？」と言われますが、我々は米作りから自分たちで行う方法で、只見の米が生み出すおいしさにこだわったものづくりや地域の思いをかたちにしていくことを続けていきたいと考えています。

—活動の原動力や信条としてしていることを教えてください。—

郡山市から移住してきた自分は、これまでたくさんの方にお世話になってきました。それこそ日本酒造りの際には、杜氏の方はもちろん、酒米を作ってくださる農家さんにお世話になりましたので、その恩返しをしたいと考えています。自分だけが得をする「一人勝ち」ではなく、地域全体を盛り上げて地域コミュニティを活性化させ、多くの人が集まる「場」を作りたいと考えています。

また、仕事を楽しむことや遊ぶ時はしっかり遊ぶといったオンオフの切り替えを大切にしています。大人が楽しそうにしていることで、子どもたちが将来へ希望を持てるのではないかと考えています。

—子どもたちへ伝えたいことをお願いします。—

子どもたちには、自分の生まれ育った地域のことをもっと知ってほしいです。生まれた場所を離れた後に生まれ故郷の良さに気付くことがあります。それも地域のことを理解しているからこそです。会社としても、地域の子供たちと一緒に田植えや稲刈りをしたり、小学5年生に9年後の二十歳の集いでプレゼントする焼酎「ねっか」のラベルを描いてもらったりなどの取組をしています。子どもたちがESD教育等で地域について調べる中で、我々大人が気付かされることもありましたので、自分たちの住む地域のよさについて知ってもらいたいです。

プロフィール（現職）

- ・福島県郡山市に生まれる。結婚を機に南会津町に移住し、花泉酒造にて酒作りを学ぶ。
- ・2016年より米作り農家5人とともに只見町に「合同会社ねっか」を設立し、翌2017年より「米焼酎ねっか」の製造を開始する。
- ・2017年IWSC（インターナショナル・ワイン・アンド・スピリッツ・コンペティション）2017シルバーメダル受賞を皮切りに、CINVE（スペイン政府公認の国際的な酒類を審査対象の中心とした品評会）2019最高賞受賞、TWSC（東京ウイスキー&スピリッツコンペティション）2020ゴールドメダル受賞など、数々の品評会で受賞。また、昨年末に第11回「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」優良事例にも選定された。

春の叙勲 ～おめでとうございます～

令和7年度の「春の叙勲受章者」が発表され、
本会元会員の叙勲者は次のとおりです。

なお、規定により祝電をお送りいたしました。

☆瑞宝双光章（2名）

会田 智康 様 元 桑折町立醸芳小学校校長
関本 良 様 元 喜多方市立第二小学校校長

令和7年度 小学校長会役員

◎支会長・常任理事 ○支会長

職 名		氏 名	勤 務 校
会 長		小 野 真 教	清 明
副 会 長		小 川 尚 子	飯 坂
		嶋 忠 夫	金 透
		鈴 木 正 和	鶴 城
		鈴 木 和 一 郎	原 町 一
監 事		緑 川 喜 久	柏 城
		五 十 嵐 博 也	喜 多 方 一
		石 井 智 明	双 葉 南
支 会 長 ・ 理 事	福 島	○ 小 川 尚 子	飯 坂
		小 野 真 教	清 明
	伊 達	◎ 五 十 嵐 修	上 保 原
	安 達	○ 太 田 孝 志	二 本 松 南
	郡 山	○ 嶋 忠 夫	金 透
		草 野 節 生	橘
	岩 瀬	○ 緑 川 喜 久	柏 城
	石 川	○ 双 里 義 和	玉 川 一
	田 村	○ 榊 原 康 夫	船 引
	東 西 しらかわ	◎ 仁 科 英 俊	白 河 一
		清 野 孝	白 河 三
	北 会 津	○ 鈴 木 正 和	鶴 城
	耶 麻	○ 五 十 嵐 博 也	喜 多 方 一
	両 沼	◎ 菅 家 篤	坂 下 南
	南 会 津	○ 栗 木 孝 直	田 島
	相 馬	○ 鈴 木 和 一 郎	原 町 一
	双 葉	○ 石 井 智 明	双 葉 南
	い わ き	◎ 大 石 正 文	湯 本 一
		和 田 裕 二	植 田

（備考）令和7年度から、役員選任（会則第6条(四)）の変更に
より、会員数が30名を超えない支会は理事1名となった。

令和7年度 小学校長会事務局員

◎部長・常任幹事 ○副部長

役 職 名	氏 名	勤 務 校
事 務 局 長	笠 原 聡 美	三 河 台
事務局次長	穂 積 浩	福 島 一
総 務 部	◎ 高 橋 哲 也	北 沢 又
	◎ 小 林 雄	福 島 四
	○ 島 田 祥 司	岡 山
	穂 積 浩	福 島 一
	齋 藤 仁 道	福 島 三
経 理 部	◎ 佐 藤 和 彦	蓬 萊 東
	○ 神 尾 孝 弘	鎌 田
行 財 政 部	◎ 穂 山 俊 之	清 水
	○ 車 田 敦 子	福 島 二
	佐々木 芳三郎	月 輪
	邊 見 ま ゆ み	大 笹 生
	佐 藤 育 男	大 森
	佐 藤 隆 之	小 国
	佐 藤 睦 弘	原 瀬
研 究 部	◎ 旗 野 礼 子	笹 谷
	○ 高 澤 里 美	御 山
	瀬 戸 和 子	渡 利
	田 村 亮	矢 野 目
	佐 藤 友 子	佐 倉
	永 井 崇	鳥 川
	渡 辺 博 明	野 田
	佐 藤 和 仁	飯 野
	佐々木 信晴	川 俣
	青 田 伸 一	附 属
	花 輪 忠 康	醸 芳
	石 川 勝 佳	岳 下
	高 宮 裕	明 健
	渡 部 由 美 子	東 芳
	宇 都 宮 弘	朝 日 が 丘
生 徒 指 導 部	◎ 星 秀 文	荒 井
	○ 富 田 貴 俊	南 向 台
	小 松 信 哉	杉 妻
	荒 川 信 一	蓬 萊
広 報 部	伊 藤 比 呂 美	本 宮 ま ゆ み
	◎ 長 澤 昭 仁	庭 坂
	○ 丹 治 達 也	瀬 上
	下 重 祐 三	吉 井 田
	片 平 智 幸	平 野
事 務 局	小 野 忠 大	梁 川
	須 田 尊	事 務 長
	土 田 里 美	主 事

編集後記

福島県小学校長会会報は、印刷所による編集・印刷から、
これまでのレイアウト等を踏襲しながら、県広報部員による
編集・印刷による配付へと変わりました。今後もぜひ会報
にお目通しいただければ幸いです。

ご多忙の中、玉稿をお寄せいただきました皆様方に心より
感謝申し上げます。

■発行 福島県小学校長会

〒960-8107 福島市浜田町4番16号 富士ビル2F
TEL 024-534-5411

会長 小野真教（福島市立清明小学校）

■編集 長澤昭仁・丹治達也・下重祐三・片平智幸・小野忠大

（一財）福島県教育会館事業ご案内

福島県教育会館の下記事業につきまして、ご理解
ご支援をよろしくお願い申し上げます。

- 夏休みの友
- 福島県高校入試問題集
- 福島県書きぞめ展
- 教育関係者名簿
- ◆貸会議室（教育関係者は半額）

福島市上浜町10-38 office@kyouikuikaikan.jp
TEL 024-523-0206 FAX 024-523-0208